

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No.142

(2017年3月刊行)

Untangling Disability and Poverty: A Matching Approach Using Large-scale Data in South Africa

Kengo Igei

Research Project: [南アフリカにおける障害者の貧困と雇用に関する実証研究](#)

■付加価値

障害と貧困は密接かつ複雑に関係していると考えられ、また障害自体複雑な概念であることから、障害者の貧困に関する理解を困難にしている。障害と貧困の間には、障害があることによって貧困に陥るリスクが高まる一方で、より貧困状況にある者ほど障害を持つ可能性が高まる、という双方向の因果関係が存在すると考えられている。また、障害の中でも、視覚や聴覚など機能障害の種類や、弱視や全盲など重さの程度に違いがあり、これらの違いによって直面する困難は異なりうる。このような研究課題に対して、本稿では主に以下の三つの分析を行った。まず、障害を持つ以前の貧困状況の違いから生じる分析上のバイアスを減ずるため、インパクト評価手法の一つであるマッチング法を用いて、障害者と非障害者の貧困状況の格差をより精緻に推定した。次に、分析を障害種別や障害の重さ、年齢、性別、人種、居住地ごとに分けて行い、より詳細に障害と貧困の関係を検証した。従来、使用するデータのサンプルサイズが小さいことからこのような分析の細分化が困難であったが、本稿では南アフリカの大規模家計データを用いることで、この課題に対処した。最後に、障害者と非障害者の貧困状況の格差を matching-based decomposition method と呼ばれる手法により、障害によって説明できる部分とそれ以外の要因で説明できる部分に分解した。この分解分析は上述のような双方向の因果関係が存在する場合、とりわけ有用であると考えられる。また本稿では、マッチング法によって推定された格差と分解分析で測定された障害によって説明される格差が理論上一致することを、数理モデルを用いて証明した。

■リサーチ・デザイン

本稿が使用するデータは、2011年に実施された人口センサスの10%サンプルデータで、サンプルサイズは約430万人。本稿では、年齢を6歳から64歳に限定し、視覚や聴覚などの6つの心身機能に関して、「非常に困難」または「全くできない」と回答した者と、どの機能にも「困難を抱えていない」と回答した者を比較した。マッチング法では、6歳から14歳の子供と15歳から64歳の大人のグループに対して、それぞれマッチングに用いる条件を設定し、年齢や性別、人種、居住地など指定した属性全てが一致する障害者と非障害者を対にした。比較する指標として、教育や雇用、収入、生活環境などを集計した Alkire and Foster (2011)の多元的貧困指標を用いた。

■主な結論（政策的含意を含む）

第一に、障害以外の観測可能な要因をコントロールしたうえでも、障害者は非障害者に比べて、多元的貧困という観点からより不利な状況に置かれていることが確認された。両者の貧困状態の格差は、知的障害や複数の障害を持っている人、成年男性、黒人、カラード、農村地域住民のグループでより顕著であった。また、両者の貧困状態の格差は、若年層では主に障害によってその大部分を説明でき、年齢が高い層では障害だけでなく他の要因によっても説明されることが分かり、複合差別の存在が示唆される結果となった。